

巻頭インタビュー

猪谷千春氏インタビュー

国際オリンピック委員会（IOC）名誉委員の猪谷千春さんは、日本で誰よりもオリンピック・パラリンピックを、そして五輪運動を熟知する人である。1956年のコルチナダンペッツォ大会男子回転で銀メダルを獲得し、冬季五輪初の日本人メダリストとなった。1982年からは、国際オリンピック委員会（IOC）委員としても活躍し、副会長も務めたほか、スポーツ団体の要職を歴任した。御年90歳。2021年3月には第二の故郷とする群馬県の聖火リレーで最終ランナーを務めた。そんな「ミスター・オリンピック」に開催可否で揺れる東京五輪・パラリンピックなどについてお話を伺った。

（インタビューは2021年4月2日・聞き手/松瀬学・富田幸祐）

— 昨日群馬県で聖火リレーを走られました
がどんな気持ちでしたか

日本で聖火を持って走ったのは初めてなんです。海外では仕事柄いろんな国で走っていますが、自国日本で走るのは、また格別な気持ちでした。加えて私のワイフも両親も群馬県生まれで、私もオリンピックでメダルを獲得した技術の基礎を磨いたのは、群馬のスキー場でした。いわば私にとって故郷なんです。そういった意味で、これまで世界のあちこちで走ったときとは違った特別な感情が湧いてきました。

いま、こういう時期ですが、オリンピック・パラリンピックはTVを通して世界の50億人を上回る人々がみえています。オリンピックが人々の絆を深め、世界がひとつになって、コロナ前の安全

で安心して毎日が送れる世界にはやく戻ってほしい。そういう願いを込めて、走ってきました。

— 大阪では聖火リレー中止という報道も出ていますが

もしも中止になれば残念だなと思います。そのなかにあって何か方法がないかなとは考えたりもしますが、大阪の吉村（洋文）知事が感染防止を考えてのことですので、それでもやってくださいというわけにはいきません。やっぱり国民にとっては安全ファーストです。憎らしいのはコロナであって、やむをえない選択だと思います。

— 何のために聖火リレーをやるのでしょうか

聖火リレーはいわゆる大会の幕あけ行事で今やオリンピックの象徴となっています。ヒトラーによって1936年のベルリン五輪でスタートしましたが、記録を確認すると、聖火リレーを存続させるかどうかでだいぶ議論が戦わされてきました。でも、結果として、平和のシンボルとして、オリンピックで聖火が運ばれるようになったんです。

聖火をみると、いよいよオリンピックがくるんだなって思います。主催国の国民として考えることは、やはりひとりの力では世界平和に貢献できません。しかし、オリンピック・ムーブメントを通じて——たとえば選手が試合をする、一般の観客が、試合を見て応援する——そこで世界に絆が広がる、とくに今の時代は、世界中にテレビやネットを通じて50億人以上の人がみることになりま

すが、こうした人たちの間にオリンピックを通して絆が大きく広がり、そして世界がひとつになる。パンデミックとの闘いだけでなく、今世界のあちこちで紛争が絶えませんが、紛争がいかに不必要なものかをオリンピック・パラリンピックを通してわかってもらい、平和の尊さ、真の尊さを肌で感じ、目で見、そして安全で安心して住める平和な社会を皆で築くということ、世界の人たちに共有してもらえ、聖火リレーはそのための非常に大事なツールだと考えていいとおもいます。

— もちろんオリンピックとパラリンピックもそうですね

オリンピック、パラリンピックには2つ意味があります。ひとつは平和のシンボルだし、もうひとつは実際にオリンピックでは、選手たちは日ごろ鍛えた素晴らしいワザを持って戦うわけです。その素晴らしいワザを目にすると私たちは興奮します。極限に挑戦する選手たちのひたむきな姿勢は見る人々を感動させるし、感動だけでなく私はそこで一番大事なのは、こんどの東京大会のように被災者の人たちや国民・一般の人々に対して、努力してやれば何事でもできるんだという強い力を与えてくれる。これがとても重要なことだと思います。

それと同時にテレビで、至るところで選手たちが交流しているシーンがみられます。選手達は大会期間を通して、選手村で共同生活を通して互いの理解を深め、友情の輪を広げることによって、オリンピックが理想とする平和運動に結びついていきます。ちょっとこじつけになるかもしれませんが、これが理念であり、もうひとつの大事なポイントになります。

— その理念を共有すれば、オリンピックに対する見方がもう少し変わってくると思いますがそうはなっていません。そのことに関しては？

私は、ひとつメディアに対して抵抗があるのは、あたかもオリンピックのためにコロナと戦うんだという印象を国民に与える報道が垣間見えることなんです。そうじゃなくて、コロナとの戦いは自分たちの為であって、皆が安全で幸せで平和な社会を実現した時に、オリンピックが開催できるということで、オリンピックを開催することだけが目的ではないのです。

— 順番が逆ですね。コロナに打ち勝ってオリンピックという表現は

私に言わせると、日本国民の安全はどうなるのか。我々はそのままで無理してオリンピックをやる権利もないし、やるべきじゃない。

スポーツって、必ずしも晴天の日ばかりじゃない。雨が降ったり、あるいは濃霧になったりするなかでやらないといけないこともあります。とくに冬のスポーツの場合はそうした与えられたかくな環境のなかで、どうやって大会を運営するか、選手たちはどうやって環境に対応して、試合にのぞむか、それがスポーツなんです。だから、いまのパンデミックのさなかで開催されるオリンピックは、当然ながら正常な環境の中でやるわけじゃない。そうなると高邁な理念をもつオリンピックをどういうカタチで開催したらいいかを、我々は考えた上で臨まなければいけないと思います。なにもいままでと同じようなオリンピックをやるうとは、バツハ会長もひとことも言っていません。やっぱりホスト国の国民の安全を考えます。少し前に、IOCの理事会で発表になりましたが、海外からのお客さんの数は制限する。しかもオリ

ピック関係者も、ほんとうに大会を運営するに必要な人たちだけにしぼってア krediteーションを発行する。今回東京大会に、私たちのウィフは呼ばれないんですよ。メンバーだけです。そこまで制限してホスト国のことを考えて開催する。120余年の歴史を通して、IOCの委員の奥さん方が参加できないのは、史上初めてのことです。しかし現状を見、考えた時これは当然の措置です。

— この状況では海外からのスポンサー枠や海外からの来賓等の入国も難しい

微妙ですね。王族、皇族がくるときは数10人単位でお付きもくるんです。それが今度は限られてくる。大会組織委員会からも提案があったんだけど、IOCからの打診があって、そうになっているんだと私は理解しています。決して、ごり押しのオリンピックではなく、与えられた環境のなかで、どうやったら安全で安心なオリンピックを開催できるかをIOCは真剣に考えてやっている、その証だと思っているんですが。

ポストコロナという言葉を使っていますけど、コロナ後のオリンピックはどうあるべきか。新しいアジェンダがこないだの理事会で承認されて、新しい形でのオリンピックというか、焦点が当たる場所がいままでと違ってきている。

一時オリンピックは社会の変化をリードしようとはしないけど、乗り遅れないように変化しないといけない、というスタンスできたんですが、私がIOC委員になってから少しずつ変わってきて、だいたいIOCが変化をリードする、リーダー的な立場をとるようになったんです。例えばジェンダーイコォリテイがありますが、あれは私が見た限りではIOCが最初に言い出したんですよ。

1994年パリのオリンピック kongress でわれわれが決めたことはスポーツの意思決定機関に女性の参加が少なすぎる。2000年までに先づ意思決定機関の役員の10%を女性にする、2010年ま

でに20%にするとか、決め発表しました。それと同時に、ジェンダーイコォリテイを促進させるために、オリンピック選手の男女参加比率に関しても、今まではだいたい6:4で男性だったんですが、今度の東京では5.1:4.9まで詰まってきました。そして平昌大会から、夏冬全スポーツの中に女性の部門が実現しました。

これにはずいぶん苦勞しました。はっきりいって、不賛成の委員もいました。最大の課題は女性にとって競技の危険性なんですね。冬で何が一番苦勞したかというときスキージャンプです。女性にはちょっと無理なんじゃないかという意見がだいぶありましたが、選手たちと話し合いの結果、遂に女子の種目として認められました。このようにしてジェンダーイコォリテイ施策は、IOCが率先してやり始めたことなんです。

それだけに、この間(2021年2月)の森(喜朗)会長の発言は、私たちには非常にショックでした。組織委員会の会長なんだから、やはりオリンピック憲章をよく勉強してもらって、IOCはジェンダーイコォリテイを1994年から推進してきているんだということを頭にいれてもらって発言してほしい。とくに会長は非常に影響力のある方ですから、そうした方から、あのような言葉が出るとは、本当にびっくり仰天しました。

— もっとオリンピック憲章を勉強すべきですよ

私も退任して今では肩書に名誉がついたもんだから近頃ちょっと怠けていて申し訳ないけど、現役の時は年に一回は必ずオリンピック憲章を読んで、勉強をしておきました。それをやらないと森さんの発言みたいなことが起こりますよね。まだ森さんはIOCの委員じゃないから、ある程度許されますけど、もしも私があんなこといったら許されません。憲章はIOCの憲法です。そして都度内容が変わりますから、やっぱりIOCの委

員は、それについていくようにしないといけないのです。

— 森さんが発言されたときに、IOC委員で日本オリンピック委員会会長の山下さんがその場にいたということですが

その場で言わなくても、あとでそっと一言、注意したほうがよかったですね。森さんは、非常に話術にたけた方で私は、いつも氏の話し方には感銘をうけているんですがそれだけにショックでした。

一時コロナ禍のもとでオリンピックを開催すべきか否かで議論が沸騰してた時、私は、よく言ってくれたと賛辞をおくった選手がふたりいます。ひとり内村航平君で、どうやったら開催できるんだ、それを先づ考えるべきであって、始めから中止ありきで考えを進めたら前に進むものも進めなくなってしまふ。

内村選手の発言、あれは、本当にすごいなと思いました。私は前から彼と同じように思っていて、だれか言わないかなと思ってはいたけれど、まさか選手の内村君から聞けるとは思わなかった。また同時期に、何時までも開催が決まらなとモチベーションが上がらないとか、コンディショニングが思うようにできないと、不満をもらしていた選手やコーチ達を多く見かけましたが、そのなかにあつて石川佳純選手は、ふだんの年だと試合がたくさんありすぎて、新しい技術を考えて練習する時間がない。だけど、今回はパンデミックのために試合が少なかったから、不得意なテーブルに密着してライジングボールを打っていく、それをじっくり研究し、練習することができたのが、全日本選手権で勝てた一番の勝因とインタビューに答えていました。これこそ、アスリートとしての立場をほんとうに理解している発言であり、文字どおり災を転じて福となした素晴らしいケースでした。

そういえば、内村君は日体大の卒業生ですよ。

— 猪谷さんのお話を聞くと、私が想像していたより、オリンピックが意外に柔軟性があるものなのかなという印象を受けます。

バッハ会長は、Bプランはないといったけど、私は彼の気持ちのなかにはあったと思いますよ。

— 今回の延期でオリンピックは、オリンピックアードの4年に1回のサイクルを崩すことになったのも衝撃的だったのですが。

そんなことを言い始めたら、我々はオリンピックの開催地を選ぶときは今まで7年前に一大会しか選んでこなかった。二大会先まで選ぶことはしていなかった。オリンピック憲章は大事だけど、やっぱり時代、環境が変わってきているのだから、譲れないものはあるにしても可能なものに対しては、臨機応変にかえていく必要があります。しかしオリンピックの高邁な理念である、スポーツを通して世界平和の構築に貢献するということは半永久的に変わりません。

例えば、行く目的地は変わらないけど、行く道はいく通りもある。その時々に適した道を選んで歩いていく。そういうふうを考えてもらったら分かりやすいのでは。

さっき、アスリートとおっしゃったけど、今回キャンセルになったら、オリンピックに一生出られない選手が出てくるわけです。そういった選手も救わないといけない。1年延ばしても、あくまで呼称には2020年が残っているわけです。これも選手のことを思ってですよ。アスリートファーストだから。今回しかでられない選手たちが多数いるわけです。例えば、空手にしても野球にしても、年齢的にも、これで引退すると決めた選手もいるのに、これで中止となったら・・・延期でも

開催すれば、そういった選手を救うことができる。

— その柔軟性はIOCメンバーのメンタリティーですか

必ずしも、そうとも言いきれません。私が提案していることもすでに30年かかっているけど、まだ実現はしていないものがあります。30年前のうんぬんというのは、IOCが抱えている課題のひとつに、夏季大会の開催経費が非常に高額なことからの発想なんです。冬のオリンピックはそれほど問題にはなっていない。それは競技スポーツの数が7スポーツと少ないからなんです。これは私が言い出した一人で、他にも賛同してくれたIOC委員もかなりいました。そのアイデアは、夏季大会の競技をよく見れば、冬場でも開催できるインドアスポーツの数が結構あるんです。また近年、オリンピックの広域開催が認められるようになって、場合によっては国境をまたいで、ふたつの国がホストできるようになりました。それに近頃冬のオリンピックは、大都市のそばでやるのが多くなりました。

その結果雪のスポーツは山間部でやる。それ以外のスポーツは都会でやったほうが、例えば新しいスケート場を作る必要もないし、アイスホッケー場を作る必要もない。そして、夏季大会実施競技の中からインドアスポーツを冬の大会に動かすことによって、夏季開催のオリンピック大会種目がへり、開催経費の削減につながります。また、今回もそうだけど、空手とか野球だとか、オリンピックの実施競技に残りたいスポーツが沢山あります。そういうスポーツが残留できるスペースも確保が可能となります。そうなれば、さまざまなメリットがあるんじゃないかというのが私の考えです。

ただ夏季大会での実施競技関係者からすると、冬季大会は何といたらいいか、準オリンピックという意識があるんですよ。夏がファーストで、冬がセカンドと。ということで夏の競技団体の人

たちの中には冬に動かされることを嫌うスポーツがいるのです。

ただ理事会で私の案が通らなかったのは、反対する人たちの中に、IOC憲章によって、冬のオリンピックは、雪と氷のスポーツに限るとあるから、それを変えることはできないと言っているんです。私にいわせると、IOCはよく、ルールを変えているじゃないかって。

会長からは、グッドアイデアだけど、時期尚早じゃないかと、慰められています。でも、私はいつかそういう時期がくるんじゃないかと思っています。

— 例えば、オリンピックに入ろうとしているものにeスポーツがありますけど、これは冬でも全然OKですよ。

OKです。スポンサーもオリンピック大会の数がふえれば露出度が広がるから、歓迎するでしょう。ところで、まだIOCに、スポーツの定義というのがないんです。何がスポーツなのか。通常、我々が考えるのは、フィジカルな動きを伴うものがスポーツの根幹だと思っているし、それを理由にeスポーツを反対する人もいます。だけど、ライフだとか、ピストルの競技はどうなんだ。だったら、eスポーツも同じですね。

それと、私が心配しているもののひとつに、これは私が名誉委員になってから更に変わったのですが、スポーツによってはあまりにもアクロバティックになりすぎて、一歩まちがうとオリンピックがショーの世界に移ることを心配しているんです。

先づ選手たちにとって、フィジカルリスクがかなり伴う。加えてオリンピックは見世物じゃない。それと一時、心配していたのは、選手の中で組合みたいなものが出来そうだったこと。賞金を出せとか、もっと選手たちを経済的に手厚く扱ってほしいとか、圧力団体ができそうになったこと。こ

れも、見せるスポーツに、力が入り過ぎてしまった結果かなと思われま

す。スキーも、種目によってはま

— 猪谷さんが IOC 委員になって以降、IOC は経済的に、規模的に大きくなってきて

私は、オリンピック・ムーブメントの推進という

— このあたりで、テレビの放映権料の高騰化もストップですか

これ以上高くしたら、放映してくれる局が少

ようになるかもしれないと心配しています。

— テレビに代わってインターネット関係が入ってきていますが

それは考えています。しかし、ひとつの難しさは、映像権というか、それこそ開会式の最中に簡単にスマホで、選手達がグラウンドの中から様々な映像を勝手に得ることが可能になり、その辺のコントロールが難しくなってきます。大きなルール違反じゃないから今は放置していますが、本当は開会式の入場行進の時はいろんなものを持って入場してはいけないことになっています。

— これからの新しいオリンピックの在り方の延長は、パリ（2024年）、ロサンゼルス（2028年）と続きます。2032年はブリスベーンになりそうですが

決めるのは、せいぜい、2つ先まで位が適当でしょうね。ちょっと3つ先まで決めるというのは、理由はその間に世界は大きく変わる可能性がありますから。もともと4年ごとに、夏冬同年で開催していたのが、いまは2年ごとに変わったでしょう。これも大きな変化でしたが、しかし今は、12年先まで決められるようになりました。これはあまりにもオリンピックは経費がかかり、肥大化しすぎたということで、立候補都市がなくなるんじゃないか、そういう恐れも多少あったんでしょう。それで先まで決めることになったんですけど、12年先というと、国によっては、政府が変わり、IOCと結んだ契約内容の変更を余儀なくされる可能性も出てくる。私はあまり賛成ではないですね。

それよりもっとどうしたら開催に興味をもってくれるかをIOCは考えないといけないと思います。

— オリンピックの新しい形、変えたいところは

そうですね、まあ、今回は、史上もっともお金のかかった大会になるでしょうけども、もう少し経費を抑えることを考えないと、先ほども申し上げましたが開催が何時もおなじ都市でたらい回しをするようになったら、それこそオリンピック・ムーブメントの推進に支障をきたします。大きな変り方でいえば、東京大会が希望した追加競技が5種目。全部で32のスポーツ、これは、いままで最多です。私は、この方式があまり好きじゃない。というのは、3回も4回もオリンピックに出る選手がいるような時代になってきているので、競技スポーツの継続性が選手の間で求められる。

こんどの東京で空手があるから、一生懸命やって空手のオリンピック代表になって、それで負けた選手は、次の大会で勝とうとするし、勝った選手は2連覇を狙おうとしますよね。

だけど、次のパリ大会では空手が入っていない。選手ファーストで考えると、選手がかわいそうだと思う。それと、もうそろそろ、実施競技の入れ替えを考えてもいいと思います。あまりいまの社会にマッチしていない競技は、新しいものと入れ替えすれば、肥大化の抑止にもなります。

— 東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとは

開催ができたというのはこの時点でまだ早いかもしれないけど、まずは選手の為を思うとキャンセルにしないで今年まで、延期したということがレガシーになりますね。で、さきほどいみじくもおっしゃられたように、IOCはフレキシビリティがないように思われているので、これなんかもす

ばらしいレガシーのひとつになると思いますね。今回はパラリンピックがオリンピックと同等に扱われるようになった。これも大変大きなレガシーですね。

更に、それこそ内村航平選手が云った初めから諦めないで、どうやったらオリンピックを開催できるか、という前向きなものの考え方なんかも、ひとつのレガシーと考えてもいいと思います。

— オリンピックも無事、開いてくれるといいのですが、また、新型コロナが拡大すると危うくなるのでは

あります。世の中は常に動いていますから、要するに、平和な世界じゃないとスポーツはできません。そこでもうひとつ、レガシーとして思ってもらえるとよろしいのですが、これは東京大会だけに限りません。それは、政治とスポーツ、昔は一緒の土俵で考えてはいけないというのが常識だったけど、1980年、1984年のボイコット以降、IOCは政治に打ち勝つ力はないけど、いかに政治と協調・協力しながら、オリンピック・ムーブメントを進めていったらいいか、ということに腐心してきました。そして今やスポーツは政治的にはニュートラルであり、その立場は普遍であるというものをオリンピック運動は勝ち取ってきました。

けれどやっぱり、東京大会だって、政治の支援がないとできないことがいっぱいあるんです。例えば、セキュリティーの問題、それから入国の問題、コロナの問題等がそうですね。各国の政治家たちのサポートも欠かせませんよね。政治と仲良くやっていくことが、スポーツの発展にもつながるし、オリンピックにも必要なのです。政治もスポーツを必要としています。

もうひとつのレガシーですが、クリーンアスリートという言葉がでてきた。これがアスリートファーストにつながるレガシーになります。今回、

ロシアは薬物の決着がつかず国として参加が認められず、選手たちは個人資格でのみ参加できるようとりはからいました。この前代未聞のきびしいペナルティーを科したのは、ドーピングはスポーツの中では悪魔的な存在である、つまり選手の健康を蝕ばむ、そしてフェアプレーを蝕ばむ悪魔であるという、強いメッセージを世界のスポーツ界

に向けて発信したことです。

もうひとつは、前々回からやりはじめたのは、難民選手団、この人たちがひとつのチームになってオリンピックに参加できるようになり、その中からメダリストも出ています。これは難民のいる限り、これからのオリンピックのレガシーとして存在していきます。